

客員部門に二度お世話になって

学習院大学理学部化学科
生命分子科学研究所教授

馬 淵 一 誠

基礎生物学研究所には2度お世話になった。最初は1982年度から1986年度まで細胞増殖客員部門の助教授(平本幸男教授、吉本康明助手)として、2回目は1997年度から2001年度まで細胞増殖客員部門の教授(阿部洋志助教授、藤本宏隆助手)としてである。

最初の赴任の時は助教授ということもあって、会議に出席することはなく、実験をしに行くという状態だった。なかでも電子顕微鏡を頻繁に利用させていただいた。電顕室は生理研の地下にあり、基生研からは長い地下通路を通っていった。地下道の通行中に人に出会った記憶はない。不思議な空間であった。基生研に行っても誰にも会わずに帰ってきた、ということが多かった。そのため、実際には結構行っていたのだが、あまり行っていないと見られたこともあった。研究生活の中で、電顕写真を撮ったのはその頃が一番多かったかもしれない。日本電子の100CXは大変使いやすい電顕だったし、いつもベストの状態に調整されていたことは大変ありがたかった。これは技官の大場さんのおかげである。

2度目は教授会の出席が中心になった。教授会そのものは会議嫌いの小生としてはあまり居心地のいいものではなかった。特に、客員であるが故、事情の把握が不十分で議論についていけないことがほとんどであったし、普段顔を会わせたり話をしたりすることのない方々と同じテーブルについて会議をするというのも妙なものであった。常任の教授の方々も逆の意味で違和感をもたれていたのではないだろうか。しかしながら本務の東京(駒場)から基生研に出かけていくことが全く苦にならなかったどころか楽しみですらあったのは、やはり基生研の研究環境の良さ、居心地の良さによるものであろう。駒場での業務はあまりに忙しく、日々追いまくられていたためもある。一方、基生研ではいつも解放された気分であった。このような機会を得ることができたことはもちろん贅沢ではあるが、自分にとってはありがたい経験だった。

研究面では助手、非常勤研究員、大学院生の研究で大変に役に立った。東京と岡崎と2つに別れた研究室のセミナーはスペースコラボレーションシステム(SCS)の利用で解決した。本務の駒場でも基生研でもSCSを恒常的に利用していたのはうちの研究室だけだったようである。ほとんど利用されていなかったSCSの実績作りにも貢献することになった。またウニの飼育のために水槽を使用させていただいた。あれだけ広い水棲動物飼育スペースは日本ではなかなかないであろう。

二度の赴任の間に、岡崎の雰囲気はさほど変わらなかったが、いくつかの変化があった。一つは鰻屋に関してである。岡崎の鰻は関東とは調理法が違い、弾力があって大変おいしい。乙川の向こう側にうな又という古い鰻屋があって、最初の赴任の時には良く通い、帰りに長焼きを土産に作っても

らったものである。この店はいわゆる鰻の寝床のように、奥へ奥へ部屋が続いていた古い造りだった。しかし2度目の赴任の時にはもはや営業していなかったので行きつけの店を変えることとなった。

もう一つは「おおあさり」(ウチムラサキ)である。一度目の赴任の際には豊橋駅で三河湾のおおあさりを買って帰って、これを駒場の研究室や自宅で焼いて食べたことが多かった。しかし2度目の赴任の時は、販売しているのを見たことがない。もう採れなくなってしまった、ということを知った。また豊橋の駅ビルに寄り道をして源氏という店のワッパ飯を食べるのもいつもの楽しみだったが、この店も2度目にはなくなっていた。

ここ数年は基生研に細胞運動関係の研究室がなくなってしまったため、訪問する機会がない。また岡崎の雰囲気味わってみたいとは思っているのだが。